

ティッシュ配りや客引きで溢れかえった治安の悪い大通りを抜けるとさほど大きくない横断歩道がある。

そこを渡って、分ほど歩いた少々寂れた場所に私のバイト先はある。

白い螺旋階段の横にはメイド服の可愛い女の子二人が映った看板が派手に主張していた。

二人とも私が入った時にはすでに店を辞めていたけれど、写真と名前だけではもう何年もの間、店の壁でピカピカ光りながらニコニコ笑っている。

左側に映っているめいらさんというメイドはお客さんと結婚して店を辞めた伝説のメイドだ。めいらさんの伝説は数年経った未だにメイドやお客さんの口の端に上る。そしてそれは大抵、悪い文脈で。

未だに入り口に掲げられている顔写真はなんだか晒し首のように痛々しくて残酷だと思った。

きつとめいらさんは今頃、佐藤梨花だとか川崎由紀だとか常識的な名前の年相応の綺麗な女性として生きていくはずなのにめいらさんという存在だけが残留思念のようにしつこく残っているのだ。

二〇年以上続いているメイド喫茶にはいたるところにかつていたメイドたちの残滓が潜んでいる。誰にも渡されることなく缶の隅に残された古いチェキや背丈を刻んだ柱の傷、目には見えない噂話になって残っている。

駆け落ち同然にお客さんと結婚しためいらさんは仲間であるはずのメイドにまで嘲笑の対象とされているけれど、私は羨ましいとすら思うことがある。

私もそれぐらいの気持ちで働けたらどんなに楽だろうと思うのだ。

どうしようもないことに私はお客さんが本当に苦手なのだ。鼻目にも私との容姿の程度は店の平均値に達していないから、普通に考えれば、ただのシフトの埋め草なのだけど、蓼食う虫も好き好きとはいったもので、一定数の支持を得てしまったのが悲劇の始まりだった。容姿が足りない分、私には妙なリアリティーがあり、それが店のルールを破ってメイドと直接繋がりたいと考える厄介な人々に受けていた。私に提供できるのはましろという架空の人物と話す時間だけなのだ。本当の個人情報だとか、連絡先だとかましてやプライベートの時間だとかを切り売りする気持ちにはなれない。だからといって明確に拒絶するのも骨が折れるから、できるだけ鈍感なふりをして過ごす。好きなお客さんは現実との区別がついている人。それよりもっと好きなのは店に決して来ることのない人。人気がでても大して見返りがあるわけでもないし、面倒なだけだから人気は

ない方がいい。でも、あまりに人気がなくても所在ないからほどほどに。できるだけ波風をたてずに仕事の時間を終わらせることができれば、それ以上のことは何も望まない。

重い気持ちでささくれだった木の扉を押すとベルがカランコロンと揺れて小気味良い音をたてた。

「あ、ましろさんおはようございます。」

美しい少女がチープなピンク色をした合皮のソファから半身をおこして私に声をかけた。

タオルケット代わりにしていたらしい千鳥格子の大きなマフラーがなだらかな肩をすべり、はらりと床に落ちる。

少女はみうと呼ばれていた。長く一緒に働いているけれど、本名は麻友という下の名前しか知らない。小作りの整った顔立ちに半月型の大きな目だけがぽっかりと浮かんでいるのが印象的だった。肩の上で切り揃えられた黒髪が少女の動きに合わせて軽やかに揺れるのも愛らしい。

みうは年下ながら尊敬しているメイドの一人だった。

まだ20歳そこそこの女の子がよくぞここまで仕事を仕事として割り切れるストイックさを身につけたものだとか常々感心していた。

めいらさんのように感情に溺れることなく、私のように惰性で続けるでもなく、みうには確かな芯があるのだ。

みうは併設のメイドバーで朝の5時まで働いて、近くで買った290円の牛丼を食べているいつの間にか店のソファで寝入っていて、ベルの音で目を覚ました。電車代が勿体無いから連勤の日は大抵店で時間をつぶす。

今日は珍しく、ましろさんと一緒なのか。ましろさんは温厚な性格だし、仕事に大してまるでやる気がないからやりやすいと思った。ずば抜けた美人ではないけれど、それなりに綺麗に見える角度があって、いつも困ったように笑っているましろさんが一部の客に熱狂的な支持を得ているのをみうはなんとなく理解していた。

ましろさんと話すためだけに数十万を溶かす客もいるが、そのお金はほとんどましろさんに還元されることはない。見ていて歯がゆくなるほどましろさんはやり方が下手だ。しかし、ましろさん自身の手元にお金が入っていないからこそ、他のメイドからの妬みを買わずに済んでいるとも言える。

みうはほんの子供の時からお金への執着が人一倍強かった。高校に進学した時、若く愛らしい自分の時間を手っ取り早く金銭に変えるためにメイド喫茶のバイトを始めた。

店長にはお客さんを元気付けたいと思って仕事をしろと言われたけれど、一年のうち、350日くらいを費やして580円のドリンクで朝から晩まで粘っては、会話の時間が短いからといって自分の半分にも満たない年齢の女の子をネット掲示板で叩きのめすような人間を元気付けることに何の意義があるのかみうにはわからなかった。

1400円の時給に加え、チエキを撮ると100円バック、ドリンクをもらうと100円バック、シャンパンをあけてもらうと500円バックがはいる。

毎日髪型を変え、きっかり同じ時間ずつそれぞれの客と話し、愛想を振りまく。誕生日という設定のなんでもない日にももらったアクセサリー類はすべて翌日に売り払った。

同じ時間拘束されるなら、1円でも多く稼ぎたいと考えるのはごく自然なことなのに、一部の客と一部のメイドからは何かと目の敵にされていた。お金のためという守銭奴だと言われる。

楽しんでいると遊び感覚で仕事をするなど言うくせに。

普段は客として見られたくないと思っっているくせに都合の良い時だけ客づらする客を見ると冷ややかな気持ちになった。

結局、みんな自分だけを好きになってくれないと満足しないのだ。

「みうは偉いよね。」

ましろさんが唐突にこぼした。

「お金が好きなだけです。こんな楽なバイト中々ないし。」

それ以外にいいことはないけれど、と続けるのはやめておいた。

「仕事に対して一生懸命だし、割り切ってるのがすごいと思う。私、本当に好かれるのがしんどくてよくやめようかなって考えてるの。」

ましろはいつも通りの困ったような笑みを浮かべている。その笑顔が原因の何割かを占めていると指摘したかったが、これも口に出すのはやめておいた。

「割り切らないとやってられないですよ。私、みうを推してくれるのはいいけど、佐々木麻友と付き合いたいとは絶対に思わないでほしいんですよ。」

再び店内にベルの音が鳴り響いた。

「まだ、看板出てないよ。雑談は準備を終わらせてからにして。」

らいむはまだ20代前半だとも30を超えているとも噂されているが、実際のところは27歳である。メイドとしてはかなりとうがたった年齢であることは自覚していた。

それでも、誰よりも頑張ってきたつもりだったのに、歳をとるごとに目に見えて人気は落ちていった。

まだ20歳のみうの反抗的な態度にも自分より多額の給料をもらっていることにも腹が立っていたし、やる気のないましろののらりくらりとした態度も気に食わなかったから今日のシフトは憂鬱だった。もっともいつ頃からか自分より若いメイドを全て憎むようになっていたから、この二人に限ったことではないのだけれど。

「10年選手のらいむさんはどう思います？ましろさん、厄介な客に人気だから大変なんですよね。」

みうは屈託なく問いかけてきたが。暗に年齢のことを指摘されているような気がして不愉快な気持ちになった。

「その呼び方はやめて。」

「いっそ、めいらさんくらいお客さんを好きになれるといいんですけどね。」

みうが何気なくつぶやいた名前に呼応するように心臓が脈打った。胸の中がタイトルを含んだ煙のような重苦しいもので満たされてゆく。

めいらはプライベートでも仲がよかった数少ない同僚の一人だった。バイトが終わったあとにめいらと二人で安い酒を酌み交わしながら焼肉を食べるのが当時一番の楽しみであったことを思い出すとほろ苦い気持ちになる。あの頃はまさかめいらが客と結婚して店をやめるなんて想像もつかなかった。みうやましろのように仕事の愚痴を言いあった仲なのに突然結婚すると打ち明けられた時はひどく裏切られたと感じた。らいむの価値がどんどんすり減っていく間にめいら――佐竹真帆は子供を産み育て、順調にすごろくの駒をすすめていた。一抜けする機会を完全に逸した私はどちらが正しかったのか考えるのをやめた。

「好かれているうちが華とでも思っておけば？どうせ歳をとれば客なんていな

くなるものだから。」

半分嘘で半分本音だった。

「なんでいつもそんな喧嘩腰なんですか。」

みうは素直すぎる。思ったことはなんでもそのまま口に出さないと死んでしまうともいうのだろうか。この回遊魚のようにエネルギーな少女を好ましいと感じられるほどにはまだ歳をとっていなかった。

あのね、と言いかけたところをましろに遮られた。

「らいむさん。よかったら3人で今日焼肉食べにいきませんか？」

ましろはいつも突飛なタイミングで何かを言い出す。こういう隙は計算しても中々作り出せるものではない。

「気持ちがありがたいけど、若い人二人で行った方が楽しいんじゃない。」

「らいむさんと仲良くなりたいです。」

押し弱いましろが珍しく強気で食らいついてきた。

「そうですね、らいむさん。メイドが仲悪くて喜ぶのはタチの悪い客だけですよ。それってシャクじゃないですか？」

先ほど食ってかかってきたみうまで口を挟む。

その昔、めいらにも同じように誘われたっけ。その事実により一層苦々しい思いがこみ上げてくるのと同時に意思とは裏腹の甘やかな気持ちが湧き上がってくるのを感じた。その時、らいむはようやく自分がまだめいらを好いていることに気がついた。

「終わってからね。早く準備終わらせないと時間になっちゃうよ。」

久しぶりに仕事の時間が少しだけ楽しみだと思った。